

令和2年度病害虫発生予察情報

特殊報第3号

令和3年1月14日
発表：福島県病害虫防除所

1 害虫名：チバクロバネキノコバエ

2 学名：*Bradysia impatiens* Johannsen

3 作物名：イチゴ

4 発生経過

令和2年12月に、いわき市の施設イチゴほ場（高設栽培）において、株の萎れや下葉の青枯症状等の生育不良株が局所的に認められ（写真1）、クラウン部の褐変およびクラウン部を加害しているハエ目幼虫が確認された（写真2）。

被害株から幼虫を採取し、羽化した成虫について、横浜植物防疫所に同定を依頼した結果、本県のイチゴにおいて被害が未確認であるチバクロバネキノコバエであることが判明した。

本種によるイチゴへの被害はこれまで三重県、長野県、長崎県、佐賀県、茨城県および鹿児島県の6県で報告されている。

5 形態等

本種はハエ目クロバネキノコバエ科の昆虫で、体長は雌成虫が1.9～2.3mm、雄成虫が1.8～2.1mmで、頭部は黒色、胸部と腹部は暗褐色、翅は褐色を帯びた透明である（写真3）。老齢幼虫の体長は約4mmで、頭部は光沢のある黒色、体は白色を帯びた透明である。

なお、従来チビクロバネキノコバエ(*B. agrestis*)及びチバクロバネキノコバエ(*B. difformis*)とされていたものは、最近の分類学的研究により、*Bradysia impatiens* Johannsen（和名：チバクロバネキノコバエ）に整理された。

6 生態と被害状況

成虫は未熟な堆肥等の有機物に誘引され、産卵する。孵化した幼虫はこれを餌とし、大量発生した幼虫の一部が作物の地際部や地下部を加害する。本種は20～25℃では約15日で1世代を経過する。施設栽培ハウス等では周年発生する。本種の加害作物は多種類にわたり、これまでキュウリ、メロンやリンドウなどの花き類等で被害が報告されている。

今回確認された施設ほ場では、有機物を多く含む培土を使用し、土壌がやや過湿になっていた。また、生育不良株では炭疽病を併発していた。

7 防除対策

- (1) 未熟な堆肥を施用すると成虫を誘引し産卵を促すので、完熟堆肥を施用する。また、有機物を含む基肥を施用する場合には十分に土壌混和する。
- (2) ほ場周辺部に古株などの植物残渣、堆肥舎がある場合には、発生源になりやすいため、周辺の衛生に留意する。
- (3) 幼虫の寄生がみられる葉や花、萎れ等被害の見られる株は除去し適切に処分する。
- (4) 被害が認められる場合には、イチゴのクロバネキノコバエ類、または、チビクロバネキノコバエに適用のある薬剤で防除する。なお、防除にあたっては、ミツバチ等の有用昆虫への影響に注意する。

病害虫発生予察情報ホームページにも掲載されています。 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

問い合わせ先：福島県農業総合センター安全農業推進部発生予察課（病害虫防除所）

TEL：024-958-1709 FAX：024-958-1727 e-mail：yosatsu@pref.fukushima.lg.jp

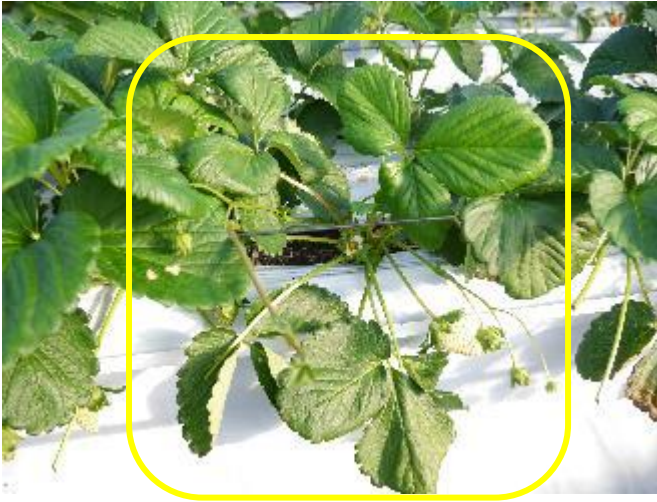


写真1 生育不良株（萎れ症状）

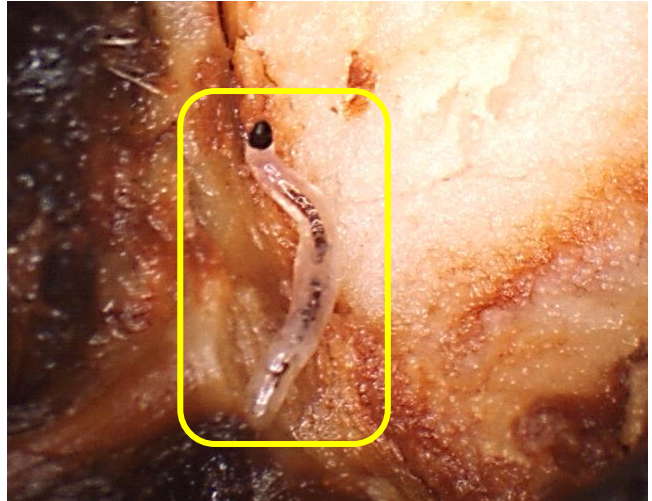


写真2 クラウン部に寄生する幼虫



写真3 成虫（左♀、右♂）